
きっとこのまま。

笑珈ニコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいつとこのまま。

【NZコード】

N8927D

【作者名】

笑珈二口

【あらすじ】

芦口笑菜、16歳。自分の存在意義、そんな漠然とした疑問に行き詰まりを感じる高校生。私は、高校教師の河神に懸想していた。先生。その言葉にどんな意味が込められているかなんて、彼は知るよしもない。恋、友達、家族、人間関係。様々な思いの先にあるものとは.....?

1・花の香り（前書き）

気軽に読んでくれたら、幸いです。

1・花の香り

「先生。」

その言葉にどんな思いが込められているかなんて、彼は知るよしもない。ただ彼は、その言葉に振り返つて、誰にでもする様に笑うのだ。

「おー芦口、どうしたんだ?」と。

そしたら私は、一緒に笑う。

心がくすぐられる様な、温かい気持ちと、張り裂けそうな程の切なさを持ち合わせて。それでも、私は一人の生徒として、他愛のない話をするのだ。

「春眠暁を覚えず。」そんな言葉が似合つ、暖かく陽気な日だつた。
ぼーとして、じつをしていると自然と瞼が落ちてき
て眠つてしまいそうになる。すつ。と暖かい空気を吸い込むと、微
かに花の柔らかい匂いがして、私は少し嬉しくなつた。

何で心地よい春だらう。こんな日は、なんだか心穏やかになる。
人の心の中の黒い部分や、些細な悩み、悲しみや苦しみ、それらを
全て緩和して打ち消してくれる、そんな気がしてならないのだ。。

実際には何も変わつてはいないのかもしない。だけどそんな思いでさえ、ちつぽけなものに思えてくる。

春と言つ季節には他にはない力があるのかもしない。なんて、思つてみたりする。

「おーい、芦口ー。大丈夫か？」

程よい低さを帶びた声が私を呼んだ。

なんて、心地よい声だろう。

「芦口、信号、責だぞ。」

トンつ、肩を叩かれ、私はゆつくつと声の主を振り返つた。先生は怪訝な顔をしている。

「どうしたんだ、お前。寝ぼけてんのか？」

先生の問いに、ぶんぶんと首をふる。信号機の前で、ぼーと立つてゐる自分の姿を想像して、苦笑した。端から見れば、私は相当間抜けだったに違ひない。

「いや、ちょっと。なんか春だなーと思つて。」

私が言つと、先生は考えるよつに空を見上げてから、ふつと笑つた。

「そうだ春だなー。気持ち良い季節だ。それでぼーとしてたつて訳だな。」

先生に言い当てられて、誤魔化すよつに笑う。

チカラチカラと信号機が点滅し始めた。慌てて横断歩道を渡ろうとする、しつかりとした大きな手に腕を掴まれた。

「え…………」

『パツパー』車のクラクションの音と共に中型のトラックが私の目の前を通りすぎていった。

青から赤に変わつた信号機をぼんやりと眺めながら、トラックに当たつて血だらけになる自分を想像した。ヒヤリ。冷汗が出て、血の気が引いていくのが分かつた。

「あ……ぶな。」

掴まれてゐる腕に力が入つた。

まだはつきりとしない目で先生を見ると、彼は私のすぐ前を走り去つたトラックの方を眺めていた。

「先生？」

「……ん？」

「あの、手……」

先生が、トラックの方から私に視線を移した。

目が合つ。

見た事もない様な真剣な目をしていた。私が先生から目を逸らすと彼は少しだけ困った様な顔をして、それから筋張った手を離した。

「危ねーな。お前、気を付けろよ。下手したら死ぬぞ。」

「はい。すんません。分かってます。」

「いや。まあ、謝らなくていいんだ。ただ……」

先生は言い掛けて口を結んだ。

「どうしたんだ」と私が怪訝に伺うと、彼は目細めて首を左右に振つた。

「まあいいや。最近どうも説教臭くて。自分で言つてて呆れるんだわ。」

そう言つて、先生は

「ははは」と笑つた。

その顔はどことなく寂しそうな印象を私に与えた。ただ疲れているだけなのかもしれない。本当の事は私には分からなかつた。

「本当に。死んでたかもしれません。もっと落ち着きを持たないと。」

「ああ。そうじろ。それとな、お前、遅刻だぞ。俺もだけど。」

先生が腕時計を見た。「八時二十分だ。」

「あ…………。」

春は他にはない力がある。それは、どうも私の勘違いだったのかもしれない。私が溜め息を吐いたら、先生が悪戯っぽく微笑んだ。さつきの寂しいさは伺えない。

まあ、いいか。

たまには遅刻も良いかもしない。
なんて思う自分がいて、これは重症だと苦笑した。

2・存在

小さい頃、猫を拾つた。茶色の毛並みが綺麗な、野良の子猫だった。

その猫は誰にも知られない様に、道端の隅っこで小さく丸まっていた。普通に歩いていたら、気付かなかつたかもしれない。でも私は何故だかすぐに、その子猫に目が行つたのだ。

その猫を、家へ連れて帰つた。母が極度の動物嫌いなのを知つて、それでも連れて帰ると案の定、私は母に叱られた。

「何してるので、そんなもの早く、捨ててきなさい。」

『そんなもの』と言つた母を、その時凄く嫌悪した。命のある生き物を『それ』と呼ぶ、母が信じられなかつた。

「でも、凄く可哀相なんだよ。助けてあげなきゃ、死んじゃうよ。」

私は懸命に訴えた。現に猫はぐつたりとして弱り切つていたのだった。母は猫を、何か汚いものでも見る様に一瞥すると、恐い顔をして、

「捨ててきなさい」と念を押すように言つた。それは、私に反論を与えなかつた。異論なんて認められない、絶対的命令。

もう何を言つてもだめだと知り、私は泣きながら、公園の隅に猫を連れていつた。震える手で段ボール箱の中に新聞紙をひいて、誰かに助けられる事を願いながら、子猫をそつとその中に寝かせた。猫はさつきよりもぐつたりとして、息絶えそうに見えた。

家に帰ると母が、いつもと変わらずに夕飯の支度をしていた。そんな母に私は疑問を持つ。

何故、そんなに平然といられるの？見たでしょ？あの猫、死にそうだつた。あなたは何とも思わないの？

でも私は、それらの言葉を全てじっくりと飲み込んで、ぎゅっと口

を結んだ。

次の日の朝、私は猫のいる公園へ向かつた。

隅に置かれた段ボール箱を、そつと覗き込むと、私は呆然とした。

そこには息絶えた子猫の亡骸が、静かに横たわっていたのだ。

死んでしまった。私は恐ろしかつた。

「ごめんね。ごめんね。ごめんなさい。」

触ると猫はまだ温かつた。私は大声で泣きなくなつた。なんでもいい。ただただ悲しくて。

でも、私は泣けなかつた。悲しみは限界を越えると、感情が無くなるのだと初めて思つた。

助けられなかつた罪悪感と母に対する複雑な怒り、命を失つた喪失感。様々な思いが、頭の中でぐるぐると旋回して、行き場を失い黒いもやとなつて胸に広がつていく。

誰にも知られずに死んでいつた命。存在理由？ 存在意義？

今に思えば、その出来事が随分と私を引っ張つていたのかもしない。

私は今でも、あの時の子猫を思い出す。

子猫の存在理由？ 私が求めていた、助けたかつた大切な命だ。

それじゃ、私の存在意義は？ なに？

黒い霧は暗闇へと溶け込んで行く。

私は分からぬ。と。

「…菜、笑菜！」

「あつ。はい。何？」

江美利の声に、はつとして我に返つた。

「ねえ、聞いてた？」

「え、あの。ごめんなさい。聞いてませんでした。」

「つたぐ。笑菜つて時々、ぼーとしてるよね。人が話してる時で
も。」

江美利はそう言つて、拗ねたようにそっぽを向いてしまつた。

「「めん、「めん。」と手を合わせて謝る。

「じゃあ、日直の手伝いしてくれたら許す！」

「もちろん。やらせていただきます。」

「よし…」

許して貰えたのか、江美利は人懐っこい笑みを私に向けた。彼女の笑顔は、場を和ませる力があると思つ。こちらまでつられて笑ってしまうのだ。

「で、何を手伝えばいいの？」

「河神がさ、資料使うから、図書室に取りに来いつて。」

今朝の事を思い出す。あの後、先生も遅刻して学年主任の平岡に嫌味言わっていたつけ。私もその後に小言、言われたけれど。

「自分でやればいいのに。あの教師、人使い荒いよね。西先生とは大違ひ。」

「西も同じもんだつて。」

江美利の背後から声が聞こえる。見るとツンツン頭の原田が、気怠そうに机に肘をついていた。

「何、嫉妬？」

江美利が冷やかすように言つ。

「別に。君を放つて置いても、多分平氣。」

「悔しいけど、当たつてゐる。」

二人は中学校からの付き合いらしい。初めて江美利と話した時に、そう言つていた。羨ましいな、と思つ。

恋人が欲しいと言うのではない。こうして、お互ひを理解し合い、尊重している事が私には何よりも微笑ましく、そして羨ましかつた。

「仲良しカツブルだ。」私は一人に言つた。

「そうか？あ、それより江美利、お前の事、三組の奴が呼んでたぞ。何か急いでたみたいだつたけど。」

「え、本当？あたし今から図書室行くのに。」

「あつ。いいよ。私一人で行つてくる。どうせ、あつちに先生いるでしょ？一人つて訳じやないし。平氣だよ。」

「でも。」

「大丈夫。行つてあげないと。急ぎなんだし。」

江美利はしばらく悩んだ末に、

「あとで行く」と私に残して教室を出でていった。

『ガラガラ。』

「あ、やっぱ先生いるじやん。」

三階に位置する図書室の扉を開けると、予想通り先生が一番奥の席に腰を掛けていた。何か本を呼んでいるらしく、私には気付いていない。

「先生。」

そろりと気付かれないように近づいて、背後から彼を呼んだ。びくりと身体が動いて、私を振り返る。

ミーヤキヤットみたい。

「なんだ、芦口か。びっくりしたー。」

「驚かそうと思つたんじゃないんですけどね。」

嘘。何の損得もない、そんな嘘。先生が私に疑いの眼差しを向けてきた。私は、それを素知らぬ顔でかわす。

「嘘つくと、また轢かれそうになるぞ。」

一ヤリと先生が笑う。

「ひられません。」

「どうだか。まあ、いいや、とにかくだいたんだ?」

「大丈夫ですよ。江美利の手伝いです。資料?を取りに。」

「ああ資料ね。でも、その本人がいないじゃん。」「江美利は急ぎの用事があるらしくて。後で来るって言つてました。」

「なんだ、パシリか。」

先生の言葉に、違和感を覚える。思わず、彼を見た。いつも見る表情がそこにあった。

「パシリって。」と笑つてみても、違和感は無くならない。

「違う?」

先生の声。違う?よく、分からない。私は、先生のやる気のなさそうな肩を見つめた。

「多分……違う。」

私は、江美利のパシリなんかじゃない。でも自信はないな。気分が一気に暗くなつた。

「あ……すまん。そんな落ち込むとは」

「そういう事は言わないで下さいよ。リアルに落ち込む。」

ははは、と先生は笑う。なんてヤツだ。

「平気だよ。多分。あいつは、そういう奴じゃないもんな。」

「……そうですよ。」

分かつてるさ。分かつてる。私は、まわりつく違和感を無視した。

「そうだ、資料だよな。資料。」

先生が思い出したように、本をパタンと閉じて立ち上がる。机に置いた本を見ると、『変身』と言う本だった。読んだ事がある。確か、作者はカフカだつたようだ。

「先生、これカフカ？」

がさがさと棚をあさる先生の背中に問い合わせる。彼は手を止めて振り返った。

「そうそう。なんだよ芦口知つてんのか？それ。」

「うん。読んだ事ある。あれですよね？あの、主人公が朝起きたら、巨大な虫になっちゃうってやつ。」

あの本は印象的だつた。巨大な虫になってしまった主人公。そんな非現実に言い様のない絶望を覚えたものだ。

「そう。虫になっちゃってさ。あれは絶望的だよな。あり得ない、つて分かつてもさ。恐いよな。なんだか。」

「怖い怖い。私、中学の時読んで、かるくへこみましたもん。」

先生が笑う。笑うと田元が柔らかくなるのだ。それが凄く魅力的だと思つた。

「この本さ、オチが好きなんだ。最後はハッピーエンド！って訳じやなくてさ、何も解決してなくて、虫のまんま。っていうのが。」

先生が子供みたいに話す。何だか、可笑しいけれど、彼の言つている事は、私を引き付けた。

何も変わらずに、物語は終わる。虫になつた主人公を周りは受け止めて。

虫になつたとしても、主人公の存在は変わらない。彼は彼の何者でもない。

私は、どうだろ？もし明日、巨大な虫になつていたら。私の周りの人間は、どんな様に私に接するのだろう。

変わらずに接してくれるのだろうか？それとも……

全ては机上の空論。

考へても真の答えは出でこない。

その時、先生の熱弁を止める様に予鈴がなった。

慌てて資料を取り出す彼を私は、黙つて見つめていた。

3・母

家に着いたと同時に携帯の着信音が響いた。父さんからだつた。
「もしもし？」

「あ、もしもし。父さんだよ。今日遅くなりそうなんだけど。」「人と会っているのか、まわりが騒々しい。雑音にかき消されないようにと、父が声を張る。だから、余計に大きな声で、耳が痛くなつた。

「分かった。ご飯は買つから平氣だよ。」

「そうか。すまんな。あと、今日母さんの所、行ってやつてな。よろしく頼んだよ。」「うん。分かった。じゃあね。」

「ああ。鍵はしつかり閉めろよ。じゃあ。」

携帯を切る。時刻は五時を回ろうとしていた。今から母さんの所へ行つて夕飯を買って帰ると、八時ぐらいにはなる。

今日は疲れてたのにな。暗くなり始めた辺りを見ながら、私は溜め息を一つ吐いた。

駅から歩いて、十分の所にある総合病院に母は入院していた。今から一年ほど前に倒れ、以来、入院、退院を繰り返す生活を送っている。

母は癌だった。肝炎ウイルスの感染による肝臓癌。一度治療して、見掛け上完全に治った様に思えて、また再発する。

最初にそれを聞いた時、なんて質の悪い病気だらうと思つた。でも幸い、母の進行具合は軽く、早期発見もあってか、命に別状はないと担当医が言つていた。

だがしかし、以前の様な活潑な母の姿がないのは確かだつた。今は、昔あれだけ好きだつた噂話も、馬鹿にした話し方もしない。あの時、私が拾つてきた子猫に冷たく

「それ」と言つた母も、もういなかつた。

その代わりに、母はあまり話をしなくなつた。私が話し掛けても、気のない返事をするだけだ。父さんも、私も、そんな母への対応に戸惑つっていた。

「母さん。」

そう声を掛けると、窓から外を眺めていた母が、ゆっくりと私を振り返つた。

「ああ。笑菜。」

そういう母の目の下の隈が前よりひどくなつてゐる気がした。顔色もあまり良くない。

「母さん、寝てないの？顔色良くないね。」

ベットの隣に置いてある丸椅子に腰掛けながら、母に尋ねる。

母は、私を一瞥して、それから『別に。』と小さく呟き、再び窓から外を眺め始めた。

沈黙だけが、流れる。

私は耐えきれずに口を開いた。

「あのね、あのさ。今日、父さんの帰り遅いんだよ。夕飯、買つてくれんだけど、何がいいかな？」

母は、まるで私の話など聞こえていないかの様に無反応。懸命に笑顔を作る。でも顔が引きつるだけで、笑つているような見えない。鉛に押し潰されるような感覚に陥る。

「昨日はさ、カレーだったんだ。今日は何しようかと思つたわ。」

「…………。」

母は、どこか遠くを見ている。今、此処にいる私でもなく、残業をしている父でもなく。もつと遠い何かを見ているのだ。

私の話は聞こえていない。

私を見ていない。

「ごめんね。母さん、疲れてるよね。私、もうかえるよ。」

私の声に母が少しだけ、一いちばんを見た。私は立ち上がり、もつ一度笑つてみる。

だめだ。こんなな笑顔なんて言わないよ。

私は黙つて母に背中を向いた。

「ねえ。」

驚いて、母を振り向く。何かを言おうとしている。静かに母の次の言葉を待つた。

そして、しばらくの沈黙の後に、母は開き掛けた口を結び、

「何でもない。」と素つ氣なく言つた。

私は、見えかけた光を見失った様な気持ちに見舞われた。

何？母さん、言つて？

そう言えれば良かった。そしたら、母は結んだ口を開いてくれたかもしれない。でも。私は何故だかそれを言えなかつた。

もう母は、『母さん』という言葉に振り向かない。私は、母さんことつて何の意味を成しているの？母さん。聞いてる？

言えないよ。私には。

頭では分かつてゐる事が、行動に出来ないよう。
きっと私は、機能してないのかもしかなかつた。

「おい、芦口ー。」
昼休み、一人で廊下を歩いていると、あの聞き慣れた声が私を呼んだ。

「なんですか。先生。」

なんの気なしに返事をする。彼は、中くらいの段ボール箱を二つ抱えていた。そのせいで、顔が隠れている。先生は段ボールの横から顔を出して、ニッと笑った。

「一つ持つてくれよ。これ。」

「嫌ですよ。忙しいんです。」

「いやいや。嘘だろ。ケチな奴だなー。一人なんだし、暇だらうが。」

「江美利が待ってるんですけどね。」

「まあ、いいじゃないか。運んでくれよ。」

本気で断るつもりは無かつた。だけど私は、渋々という顔して段ボール箱を受け取る。結構な重さで、先生を恨めしく思った。

「重い。どこまで?」

「大丈夫。芦口なら。総合室までだよ。」

失敬な。

目の前の教師を睨み付ける。が、どうやら氣付かなかつたらしい。まあ、いいや。

「あ。そう言えばさ、親御さんの調子はどうだ?」

「えつ…えつと…。」

思わず、口が止まつた。

突然黙つた私を先生は、訝しがる事も、催促する事もなく、静かに私の口から言葉が出るのを待つていて。

「…………うん。多分、大分よくなりましたよ。」

あからさまだつたかもしれない。私の声のトーンはダウンしていた。

あの母の状況を思い出すと、無理をして明るくしていっても、きつと痛々しいだけだ。

「そうか。お母さんによろしく言つといてな。」

「うん……。」

私は、嘘を吐いている。何度も何度も。沢山の人達に、何のメリットもない嘘を。

そして、多分きっと自分自身にも。

「人間、言いたい事言えなくなつたら、終わりだよ。自分にさえ言えなくなる。」

心臓が、ドクンと嫌な音をたてた。多分、私の中だけ、時間が止まつたのだと思う。

何?なんだ。それ。

先生は、前を歩く。平然と。なんでも無いよう。先生は、気付いているのだろうか。それとも、ただの偶然?

その言葉は、まるで私自身に言つている様で、私を底に突き落とすかのようであつた。

斜め前を行く先生を見上げる。横顔が、まるで別人に見えた。

「あの……なんで、そんな事……」

先生が口を開いた。

「つてさ、昨日、太宰治の人間失格よんて思つたよ。つぐづく。やつぱり太宰は深いね。」

え……?

「あの、何、本の話?」

「ん?ああ。そうだよ。悪いな、話が飛びすぎて。」

声を出して、先生が笑う。

私は拍子抜けした。そして、ホッとする。気が付くと汗が出てい

た。

びっくりした。本当に。

「人間失格ですか。読んだことがありますよ。」

それでも何故だか、私はさつきの様に話せなかつた。頭が、うまく働かない。

私は。

終わつてゐる？

言いたい事言えなくなつたら、終わり。

私は、此処にいる。

それは、嘘じやない。

そうさ。此処にいる。

けれど、そだとは誰も言つてはくれない。

私は、なにか、黒い海に呑み込まれてしまつた。必死に抵抗する。

しかし、動けば動く程、海は激しさを増し、私は溺れしまうのだ。船は来ない。

深く深く、沈んでいく。

先生の手伝いを終えて、教室に戻ると江美利の笑い声が耳に入つた。

原田と何人かの友達と一緒に雑談をしているらしい。

江美利とは、昼休みに次の課題を終わらせる約束をしていた。特に時間は決めてはいなかつたのだが、遅れてしまつたのだと思う。あまりクラスでは話す事のない人達なので、江美利に声を掛けづらい。

だめだな私は。

江美利は楽しそうだつた。あの周りを和ませる笑顔が良く映えて、生き生きとしている。

江美利は誰にだつて、態度が同じだつた。変に身構えたりもしないし、つまらない仲間意識もない。周りから自然と好かれるタイプだと思う。

私には無いものを彼女は沢山持つていた。私は、江美利を尊敬している。

だけど、時々思つのだ。

私なんかといて、楽しい?と。

自分が、小さく縮小していく気がした。

「あ、笑菜！」

その時、江美利が私に気が付いた。

「どうしたの?」と私に尋ねる。

「課題さ、もう終わっちゃつた?」

「えつ、課題?ああ!忘れてた。」

江美利が言うと、周りから笑いが起きた。私も笑う。本気じゃない。場を白けさせないためだつた。

「「めん、笑菜！」

「ううん、平氣平氣」

「江美利、ひどいぞ。芦口、可哀想に。パフエ奢りだな。俺に。」

原田が楽しそうに江美利を茶化す。

「なんだよ。あんたが奢りなさこよ。」

また爆笑。

あははは。と私の耳に入つてくる笑い声は擦れて歪んでいく。

「気にしないで。あ、じゃ私、職員室に呼ばれてるからさ。」

私はいつから、こんなにも嘘が上手くなつたのだろう。

しまいには、鼻が伸び始めるのではないだろうか。

「そうなの？分かつた。行つてらっしゃい。頑張つてねー。」

うん。と言つて、再び廊下に出る。

私の背中を押すように笑い声が響いた。

私は立ち止まって、自分の足元に視線を落とした。

『言いたい事言えなくなつたら、終わりだよ。』

先生の、あのやる気のない肩や、柔らかい笑顔が頭に浮かぶ。

先生。

胸が重圧を掛けられていくように苦しくなつた。

「先生。」

と小さく呟いた。

声は頼りなく、見慣れた廊下に消えていった。

5・暗闇

夢を見た。

暗い霧に包まれて、必死に走っている夢を。
何かを追っている訳でもなく、何かから追われている訳でもない。
何の目的のために走っているのか、走っている本人の私が分から
ないのだ。

ただ闇雲に息を切らせながら、走り続けている。
霧は次第に濃度を増していった。辺りは段々と暗くなつていき、
視界がぼやけ始める。

焦燥感。

言つなれば、それに近い感情が、心の中に沸々と沸き上がる。
それは風船の様に膨張した。どんどんどんどん膨らんで、破裂す
る事なく私の中で留まり続ける。
ひどい圧迫感を覚えた。何となく息苦しい気もする。
私は、いつの間にか走るのを止めていた。

果てしない暗闇。

何もない。

私自身が誰なのか分からなくなりそうで、私は頭を抱えた。その
場でしゃがみ込み、強く目をつぶった。

「笑菜。」

誰かが私の名前を呼ぶ。

母さん。

顔を開けて、暗闇を凝視すると、私の前に母が立っていた。

「笑菜、捨ててきなさい。そんなもの。」

母が冷ややかにそう言い、私を指差す。私の手の中には、弱々しい茶色の子猫の姿があった。

「母さん、でも…………え…………？」

私が声を出すと、母も子猫も霧に溶けて消えてしまった。

「母…………さん？」

「芦口。」

「先生？」

先生の低い声が耳に響く。しかし姿はなかった。先生は続ける。

「人間、言いたい事も言えなくなつたら終わりだよ。自分にさえ嘘を吐いたら、もう戻れない、なあ？ 芦口。」

なあ、芦口。

彼は、確実に私に話し掛けていた。私に、そう語っているのだ。
やめてくれ。
もう話さないで。

「やめて下せーーー！」

そこで田が覚めた。

嫌な夢だ。

一度と見たくない、そんな夢。昔、地震が起きて家の下敷きになる夢を見た事があるが、それより遙かに嫌な夢だと思つた。

はあ。

ため息を吐くと、疲労の波が襲つてきた。
寝てて疲れるなんて。

私は、どうしたのだろうか。

その夢を見た朝は、物凄く早起きだった。

重い体を起こして、一階に降りるとコンビングに父がいた。

「なんだ、笑菜。今日は早起きだな。」

父は、私に気付くと読んでいた新聞紙をたたみ、そう言って笑つた。

穏やか笑顔は昔と変わらない。だが、やはり老いは確実に父を蝕んでいた。

「おはよ父さん。今、何時？」

「まだ六時だよ。」

「早起き。」

「」飯、どうする？」「

「自分で、パン焼くから平氣だよ。」

「そうか。」

「父さん、今日遅い？」

「あ、そうだ。今日おそくなるから、母さんの所に替えの服、持つていってくれないか？」

私は、父を見る。

「……」が寂しそうな、申し訳なさそうな表情をしていた。

「ここよ。今日、行いつて黙つてたの。丁度良かつた。」

「その父の表情を消すよひこ、私は笑顔で答える。

「やうか。悪いな。最近、母さんの所にも行いつてやれなくて。」

父は、母さんと話せているのだろうか。

もしかしたら、父には話しているかもしれない。

「父さん。あのと」

「なんだい？」

「母さん……」

父の顔を見た途端に言葉が出なくなる。

「母さんがどうしたんだ？」

「母さん、早く退院出来るといいね。」

再び私は笑う。

今度は私自身の心を塗り潰すよひこ。

嘘つき。

私は、授業を真面目に受けている方だと思つ。

何故かといふと、大抵の生徒は寝てゐるか、ぼんやりしてゐるからだ。

集中して、しっかりとノートを取り、話を聞いてゐる私は、知らない人がみたら、きっと優等生だと思われるに違ひない。しかし、私は出来る生徒ではなかつた。

『成績が着実に落ちてゐる。』

私は、人に言われて初めて、その事実を知つた。

「どうしたのかな？何か、悩み事でもある？」

そう言つて、数学教師の西が、私を見た。

西は、女子生徒の中で抜群の人気を誇る、いわゆる『イケメン教師』だつた。

性格も良く、優しい、尚且つ格好良い訳だから、女子の中で話題が絶えない。

だけど私は、どうしても、この教師だけ好きになれなかつた。誰にも言つていなければ、話題が出る度、私は居心地の悪さを感じた。

「どうしたの？」

西がもう一度尋ねた。

職員室は、ざわざわと騒がしい。西は、穏やかな表情をしている。

「いや、特に。」

「なら、なにがあつたのかな？」

西がにこりと笑つた。

さあ、何でも話して『こらん。そんな様に聞こえる。

私は、やはりこの教師を好きになれない。

一言で言えば違和感。

その笑顔の裏側に『偽善』という文字が隠されている様で、とても素直には聞けなかつた。他の生徒は、この笑顔に騙される。しかし、それは私の偏見だらうか？ 差別だらうか？ 勘違いだらうか？

否だ。

私はこの教師の目が笑つてない事を知つていて。

「本当に何もないです。」

西は笑顔を絶やさない。そのまま、私を見据えていた。全部お見通しだよ。と言つよつに。

虫が這いずり回つているような居心地の悪さを感じる。

私は、逃げ出したい気分だつた。もういいじやないか。学力が落ちているのは、勉強時間が減つたせいだ。その自覚はある。

私は

私は、西が怖いのだ。

「本当に？ でも芦口さんが急に学力が落ちるとは思えないんだけどね。」

勘弁してくれ。

私はついに口を閉じて黙り込んだ。

足元に視線を移し、汚れた上履きを見つめる。都合が悪くなると黙り込んでしまう子供の様で、凄く格好悪かつた。

「西先生。主任が呼んでましたよ。」

その声は、まさに救いの一言だつた。

先生。

「河神先生。分かりました。ありがとうございます。」

西が、椅子から立ち上がる。私に向かって、またあとでね、と残して職員室から出でていった。

すぐに私は平常を取り戻す。

あの気持ち悪さは、どんどん静まつていき、私は、ほっとした。

「芦口。」

先生を見上げる。

今ほど彼に抱きつきたいと思つた事はなかつた。

「なんですか？」

「お前さ、極端すぎなんだよ。」

「え、何が？」

私は困惑した。先生が、私の耳元に顔を近付ける。香水とはまた違う、良い匂いがした。

「芦口さ、西先生の事嫌いだろ？」

小さな子供に秘密事を囁くような、静かで穏やかな声だった。どうして？

目を見開く。図星を刺されて何も言えなくなる私に、先生は微笑んだ。

「嫌だつたら、嫌といえば良い。」

私は、体の力が抜けていくのを感じた。

「下らない嘘は吐かなくていいんだ。」

彼は、私が車にひかれそうになつた時と同じ、真剣な顔をしていた。

驚く程優しい声に、胸が苦しくなる。

先生……。

すると、私の声に被さるように予鈴のチャイムがなつた。騒がしかつた職員室が徐々に静けさを取り戻す。

職員室の中には、私と先生の二人だけが残つていた。静寂が私達を包む。

解放された窓から、風が入り込み、私と先生の髪の毛をさらつて

いく。

先生は、さつき西が座っていた椅子に座り、私を見上げた。先生の瞳には、私がいた。今にも泣きそうな、弱い自分。

「先生、あのね。」

「ん?」

「私さ、夢を見たんだ。」

「どんな?」

「暗い霧の中を、走っている夢。なんの目的もなく、ただ走つてるんだ。」

「それで?」

「それで……母さんと、先生が出てきた。」

「うん。」

「夢の中の一人は、私を責めるようだつた。止めてくれつて。そしたら、目が覚めた。」

私は、何を話しているのだろう。

こんな話、聞いても困るだけだ。先生は、きっと呆れていに違いない。しかし、彼はいつもの表情を崩さず、私を見ていた。

「先生。」

「なに?」

「ごめんね。」

私の言葉に、彼は静かに首を振つた。そして、いつもの柔らかい笑みを讃えて、じうづのだ。

「大丈夫さ。」

その日の午後は、何だか清々しく授業が受けられた気がした。

母の病院に行つた。

替えのパジャマと下着を持って。

駅から、そう遠くない総合病院は、夕日に照らされてオレンジ色に輝いていた。

中にはいつて、母のいる病室へ。

途中、母の相部屋のおばさんと会って、お辞儀をして病室へ入ると、母は本を読んでいた。

「母さん、着替えを持ってきたよ。」

私の言葉に母が顔を上げた。

「ああ。ありがとう。」

「うん。調子はどう?」

「特に。」

「そつか。」

やはり、口数の少ない母。不安が顔に出ないよう心がける。椅子に腰を掛けて、息を吐いた。

沈黙。

私と母を取り巻く、この沈黙が何よりも憎らしかった。母は、本をパタンと閉じた。私が母を見ると、なんと母が小さく口を開いたのだ。

「笑菜。」

驚いた。思わず声が大きくなる。

「なに?」

「あなた、ほら昔、猫を拾つてきたじゃない?」

まさか、あの子猫の事が母の口から出るとは思わなかつただけに、私は言葉を失つた。そのかわり、こくりと頷いてみせる。

母は、昔話をしている様に、遠くに視線を向けていた。

「私が、動物を嫌いなの知つている筈なのに、拾ってきた、あなたが信じられなかつた。」

「ごめん。」

「違うわ。謝らないで。それで、あの後、あの猫はどうなつたの？」

母を見た。

でも、母は私を見ない。

「死んでたよ。段ボールの中で。まだ温かくて、眠つてるみたいだつた。」

母の唇が微かに動いた。

はあ。と溜め息を吐いた気がした。

「そう。」

「なんで今更、そんな事聞くの？」

すると母は、片手で耳を塞ぎ、俯きながら話しあじめた。

「毎晩、夢に出てくるの。あの時の様に弱り切つた様子で。今にも死にそうなのよ。私を恨んでいるように泣くの。悪い事をしたと思つてゐる。私は、最低な人間だつたの。死の淵に立たされて、ようやく分かつたのよ。私は、最低だつた。その猫だけじゃない。私は、あなたにもひどい事をしてゐるわ。他人を傷つけたりしてきた。嫌なのよ。自分が。」

何かが爆発した様に母が話していく。

私は、何も言えなくなつた。

母が、そんな事を思つていたなんて。

あの子猫を『それ』と呼んだ母は、私の遠い記憶の中に消えていく。

私は、母があまり好きでは無かつたのだ。

病気にかかる前までは。

だけど、今私の田の前にいる母を私は抱き締めたくなつた。

今まで』めん、と。

そして、私自身の思いを伝えたかった。
今なら言える、そんな気がしてならなかつた。

でも

いざ口を開くと、何も言葉が出てこない。

私は戸惑つた。

「母さん。」

「なに?」

「あの」

母が私を捉える。

初めて目が合つた様な気がした。

何故、何も言えないの?

馬鹿な私。

「母さん、早く元気になつてね。」

もつと違うの。

母にぶつけたい言葉が沢山あるのに。

「うん。」

母の反応がうれしくて、嬉しくて。

だから、私は言えなかつたんだ。

今日、先生に話したより言えれば良かったのだ。
何でも。

黒い霧が私を包んだ。

気持ち悪くて吐きそうになる。

苦しくて、息が詰まつた。焦れつたくて、うじうじの弱虫な私は、
いつまでも私の中に巣を張つて留まつている。

夢の中の母が出てきて、呟いた。

「弱虫。」

私の中で、何かが破裂した気がした。

それは形となつて私を襲つた。

次の日から、私の生活の何かが狂いはじめたのだ。
始めは、江美利との関係だつた。

いつもの様に学校へ行くと、江美利の様子が可笑しい事に気付いた。
私が、

「おはよう」と言つと、挨拶は返してくれるものの、何だか他人行儀で、いつもの様に話しかけて来ないのだ。

最初は、気のせいだと思った。

だが、どうやら私の考えすぎでも、気のせいでもないらしい。

現に私は、今一人ぼっちだ。いつもなら江美利と過ごしている休み

時間も、江美利の姿は教室ではなく、私の側にも無かつた。
そして何より、彼女は私を避けていた。

とうとう、嫌われてしまったのかもしれない。

考える事にも、疲れてきた。

私が悪いのだ。

母にも、江美利にも、何も言えない。

私は、おわつてしまつた。

きっかけを作つた母を私は、無視したのだ。

江美利にも同じ。

今まで私と居てくれた事が奇跡のようだつた。

しかし、氣を抜くと黒い霧が私を包む。

私は悪くない。

分かつてくれないあいつらが悪いのだ、と。

でも、それは違うと首を振つた。

どれが私の気持ちなのか分からなくなつた。

私何かした？

江美利にそう聞きたかった。だけど勇気がない。

江美利は原田と、この間一緒にいた子達と行動を共にしていた。
だから余計に聞き辛い。

江美利が急に遠くへ行つた。

私といる時よりも楽しげな江美利がいる。なんだか巨大な石に押し
つぶされそうな気がした。

訳が分からなくて、目が眩んだ。

その日の昼休み、私は教室から逃げ出した。

もう、江美利の顔を見るのも辛かつた。

攻撃された訳でもないのに、江美利に存在を否定された様で、目眩
がした。

完全なる無視だ。

トイレですれ違つた時に

「江美利」と呼んでみた。

どこかで、彼女が笑つてくれると期待してたのかもしれない。
しかし、現実は私に優しくない。

江美利は、私を見向きもせずにトイレから出でていった。

弱虫の私は、教室から逃げ出す。

江美利は、どうしたのだろう?

疑問に疑問。そして悲しみと寂しさ。

孤独は嫌いじゃなかつた。しかし、江美利の存在は確かに大きかつ
たのだ。

「いつか自分にさえ言えなくなる。」

先生の言つた事を思い出す。

やるせなくて目を瞑つた。

もう、この学校には私の居場所なんて無いよつた氣がしてならなかつた。

教室から出て、突き当たりにある階段を思いつきり駆け上がつた。最上階には、立ち入り禁止の屋上への扉がある。

その扉に手をかけた瞬間、背中を叩かれた。

心臓が飛び出そうになる程驚き、パッと扉から手を離した。それから後ろを振り返る。

「芦口さん、関心しないなあ。」

私は、声の主に顔を歪めた。

「西先生。」

「こんな所で何をしてたの?」

にこりと笑う。

何でも出来る、そんな雰囲気を醸し出す西を嫌悪した。

「何もしません。」

「どうかな。最近の君はどうも落ち着きがないみたいで。屋上は立ち入り禁止だよ。」

「分かつてます。入るうだなんて、しません。」

「そう?でも、念のために。入ってはいけないよ、芦口さん。」

私が、言い返せないのを知つていて、嫌味を言つているのだ。

いい先生なんかじゃない。

「この教師は、私を馬鹿にしてる。

「ねえ、芦口さん。」

視界が歪む。

彼の声を扼殺するよつこ。

「君は、出来る子だよね？他の馬鹿とは違うドシヨ。君は優等生なんだ。」

悪魔の様な囁き。

ほり、やつぱり。

この教師は猫を被っているんだ。

なんでこんな奴。

「ダメだよ。君は勉強をして学力を取り戻さなくちゃ。」

彼の功績のための道具なのだ、私は。

吐き気がした。

「頼むよ。芦口さん。」

西が私の肩に手を置いた。そこから生暖かい体温が伝わる。

彼の薄汚れた感情に、じわじわと侵食されて行くよつな気がした。

私がなくなつていいく。

彼の圧力に負けて。

手を伸ばして必死に這い上がる。

黒い霧は無情にも私を覆い尽くした。

「君は僕の言つ通りにしていればいいんだよ。」

悪魔がニヤリと笑った。

口元が釣り上がつただけの醜い笑みだった。

どうして、うまく行かないのだろう。

昔からそうだつたのだ。

見かけでは、うまくいっていたと思つた事が何かの弾みで、そうでなくなる。

思えば、いつもそうだつた。

学校での生活が充実すると、母と父が喧嘩をして、家庭が円満になると、友達との間に亀裂が入つた。

私には両立する事が出来なかつたのかもしれない。

もしくは、両立する術がなかつた。

私は、そこについて居ない様な人間だ。

『存在』なんて考えるだけ馬鹿馬鹿しいと思つた。

私一人で、存在理由だの意義だのを考え、出るはずのない答えを必死に探している。

自棄になつていないとは言えないけれど、もつ何だか全て面倒くさかつた。

私はこんなにも脆くて弱いのだ。

母さんが欲しがっている言葉を飲み込み。

友達が離れると直ぐに、何も出来なくなる。

西の使いごまになり、私はそれに抵抗する余地もなく、ただ言われたように動くのだ。

泣きたいと思った。

何も考えずに、大声で。だけど、涙は枯れてしまつたように流れではない。

あの時と同じだ。

私が求めた小さな命が亡くなつた時と。

悲しみを越えると涙は流れない。

その代わりの、虚無と喪失だけが渦を巻いて浮上する。

午後の授業を初めてサボつた。

どこかで、あの西の一ヤリと笑つた顔を思い出しながら、私は優等生ではないと首を振る。

それでも無断で休む勇気など私にはなくて、結局は仮病を使い、保健室で横になつた。

保健室には、誰もいない。

時計の針秒の音だけが、規則正しくリズムを刻んでいる。
微かに湿布の匂いのするベットに仰向けになり、清楚な白い天井を見つめた。

多分、今は誰にも何も言われることはない。
唯一、ここだけが私を受け入れてくれた気がした。

考えなくていい。

何も。

私は、溢れ出る不安の波を遮るように、拳を天井に向かって突き出した。
音もなく私の腕は空気を貫いて、そして何も変わることなく、私の拳は静止する。

虚しい。

私はその腕で畳を覆つた。
途端に広がる暗闇。

堪らず溜息を吐く。

その声がやけに大きく保健室に響いて、少しだけヒヤリとした。

7・破裂

江美利の無視が終わる事は無かった。

それどころか彼女は本格的な完全無視を決め込むようになつたのだ。
あれから一週間が経ち、私はとうとうクラスの皆からも孤立する様になつた。

まあ、端から友達など江美利以外にはいなかつたも同然なのが。

ただ私はそこにいない物とされていた。

私は、疲れているのかもしぬなかつた
もう、どうでもいいのだ。

江美利の行動が意味する事が、私には分からぬ。

しかし、それが分からなければ江美利は一生、私と口を聞いてくれ
ない気がした。

そして私は、それを知る術など何も持ち合わせていないのだ。

「芦口。」

その日の昼休み、私は意外な人物に声をかけられた。
江美利の彼氏である原田である。
教室には江美利本人の姿はない。

心臓が一瞬、停止するかと思つた。

「な、なに？」

半ば久々に出したであらう私の声は、少し震えていた。何故だ？私は、自分が傷付く事を恐れているのかもしかなかつた。

「江美利の事。」

原田が素っ気なく言つた。

逃げ出したくなる衝動をどうにか押し止めて、私は辛うじて頷いた。

「こままでいいと思つてんのか？」

どしどとした声色で原田は、私を責め立てるように問いただす。チクリと針で胸を刺された氣分になつた。

「思つてないよ。」

言つてみたものの、私は本当に？と自分自身に問いただす。もういいじゃないか。と自棄になる私がいる。

疲れているのだ、と。

それは、私の本音なのだろうか。

分からぬ。

私は、自分にまで嘘を付こうとしている。

何だか心が枯れていくような気がした。

訳の分からぬ焦燥が私を襲つ。

「えじや、どうにかしろよ。お前、ふざけてんの？」

原田の口調が次第に強くなる。

クラスの何人かの人間が不穏な空気を察知して、それとなくこちらに視線を向けているのが分かる。

だけど私は、その一言にとてつもない嫌悪抱いた。

原田が江美利を大切にする気持ちから出た言葉と言ひ事は言われなくても分かっている。

しかし、彼の一言は私に黒い点を落とす。

それがじわじわと拡大して、私を包み込むのだ。

ふざけてる?

そんな訳あるものか。

私は、私は……。

その時、私の中に渦巻いていた感情は、確かに怒りの他の何物でもなかつた。

眩暈がするくらいに燃え上がる炎を、私は無視する事が出来なかつた。沸々と込み上げるそれは、私がこれまで抱いて来た、どの感情よりも強く、そして確信を得ていた。

叫んでしまえば、楽になる気がした。

でもそうしてしまえば、確実に何かが崩壊する。

しかし、何が分かるといつのだ。

「お前に何が分かるんだよー!ー!」

思うより先に、私の口から発せられた声は、昼休みの穏やかで騒々しい空気をピタリと止めた。

教室に反響する私の叫び声。

初めて、こんな声を出した、と頭の隅の方で考える。

私は思ったよりも冷静であった。

原田の困惑した顔と、白けたような驚いた様な生徒達の視線を私は、受けとめた。

心臓が狂つたように脈を打つてゐる。

けれど燃え上がつた炎は、行き場を無くし、後は萎んでいく一方だつた。

「お前に、お前に何がわかるだよ。もう知らない。面倒だ。」

打つて変わつて力を無くした私の声は消え入りそうな小さな物だつた。

私の口は、炎が完全に消えてしまつ前に、断片的な感情をポロリとこぼす。

「もう、分からんんだ。」

近くにあつた机を蹴つてみる。

ガタンと大きな音を立てて倒れた。

教室には、いつの間にか沈黙が満ち、クラス全員が私を凝視してい
た。

「ふざけんな。」

そう言葉に出すと、視界が暗んだ。

私は、もう私であつて私ではない様な気がした。

意味もなく私は、すぐ傍にあつた椅子を持ち上げる。

教室が再び騒めいた。

原田が唖然としている。

私は、そこにある何かを壊すように、椅子を投げ付けた。

それは原田の右側の床に落ち、小さな傷を作った。

「おい、何してんだー！」

凍り付いた教室に、声が響く。

ひどく落ち着く声に、私はドキリとした。
今、自分がしようとした行動を思い返し、喪失に似た悲しみ襲われる。

息が出来なかつた。

「……先生！」

周囲から声が上がる。

私の目線の先に河神がいた。

「芦口。」

彼は、私が車に引かれそうになつた時のそれと同じ、険しい表情をしていた。

「お前。何してんだよ。」

先生が私に言つ。

その声に顔が熱くなる。

私は、居たまれなくなり思わず、教室を飛び出した。

「おー、芦口ー。」

先生の呼び止める声と同時に、クラス中が一斉に騒がしくなった。
でも、そればかりか遠くのようで、私にはあまり現実味がない。

芦口一と先生が呼んでいる。

私は、速くなる歩調に任せて走りだした。

「待てって。」

しかしそれより速く、先生は私の腕を掴んだ。
私の視界が揺らぐ。
静寂が広がった。

もう何が何だか分からない。
夢を見ている気分だった。

「芦口。」

先生が再び私を呼ぶ。

見るとそこは、職員室の前だった。

昼休みの終わりを知らせるチャイムがなる。
それは、ひどく長く感じられた。

「怒らないから、逃げるなよ。」

チャイムが鳴り終わると同時に先生が口を開いた。

「理由なんて下らない事も聞かないから。」

そう言つ先生は、私が今まで聞いたことが無いような優しい声をしていた。

私の中に罪悪感の3文字が浮上する。
私は、先生から視線を外した。

「腹が立つたんです。だから、私…。」

いい訳を考えている小学生みたいだ。
情けなくて恥ずかしかった。

「そうか。」

先生は、だけど優しく私は余計に喪失を覚える。
今では、炎も消え、虚無感だけがそこにあつた。

「もう、分かんないんです。上手くいかない。」

私はその虚無と罪悪感を振り払おうとして、首を振る。
しかし分からない、なんて言葉ではもう何も誤魔化せはしないのだ。
随分前から、分かつていていた事じゃないか。

「誤魔化す事は何も変わっちゃいないのと同じだ。」

先生が静かに言つた。

「分かつてますよ。そんな事、言われなくても分かつてます。」

速くなる口調を無理矢理、抑える。

「嫌なら嫌といえば良い。苦しいなら苦しいと、助けて欲しいなら助けてって言えれば良いじゃないか。」

先生はあくまでも静かな口調であった。
ゆっくりと私に言い聞かせるようになつた。

「言えないよ。怖い。」

「怖くても、言わなきや伝わらない。でも、お前はさつも聞えただ
る？」

原口に出た言葉は、少なくとも私の発した感情だった。
始めてだ。
しかし、私が聞いたかった相手は原口じやない。

「本当に言いたい人には言えない。」

「何も出来なくなつちまつぞ？」

「……ねえ、先生。私は何んで此処にいるの。」

また浮かび上がる疑問。

存在意義、理由。

馬鹿らしい。

でも私もそんな馬鹿らしい物がほしいのだ。

「理由なんか無いや。だけどお前は、此処にいる。」

私は、先生を見た。

彼が、少しだけ表情を緩めた気がした。

「あのね、先生。」

「ん？」

「私ね昔、猫を見殺しにしたんだ。」

先生は静かに聞いている。

「私は、嘘ばかり吐いてた。先生に、いつか本当のことが言えなくなるつて言われて、怖かった。」

何の脈がらのない話が断片的に口からこぼれる。
もう歯止めなど忘れてしまった。
止まらない。

「母さんに、言いたいこと沢山ある。父さんにも江美利にも。でも私は言えなかつた。嘘ばっか吐いてたから。」

「うん。」

「私が悪いのは分かつてるよ。」

そうだ。

分かつてる。

分かつてるけど。

先生を見た。

視線が交わる。

「だけ……」

真実を口に出せば楽になる。
そう信じたかった。

「だけど、私を必要として欲しかった。」

言葉に出してしまえば脆く、私の真実は薄くなつて消えてしまう。

「最初からそういえば良い。」

私は、泣いていた。
胸が押し潰されそうで、だから私は崩れるように泣いた。

「芦口、ごめんな。」

先生が小さく呟いて、私を抱き締めた。

た。

胸が震える。

涙が止まらなかつた。

「「」めん。」

静かな廊下に、先生の謝る声と私の泣き声だけが残っていた。

次の日は、とても天気の良い日になつた。

「西口。」

内心びくびくしながら教室へ入ると、案の定原田が声を掛けってきた。
なんとも氣まずい。

しかし私は、逃げる訳には行かなかつた。

「な、なに？」

恐る恐る尋ねる。

「……ごめん。」

彼は小さく、そう言いつと低く頭を下げた。

「え？」

思いもよらない事態に、私は拍子抜けする。
最悪、殴られるのも覚悟していたのだから尚更だった。
そればかりに、少々焦る。

「あの、いや私。その……ごめん。」

私も言ってから頭を下げる。

謝らなくてはいけないのは私の方だ。

しかしあげてくるのは陳腐な言葉ばかりで、嫌になる。

「謝んなよ。芦口だって色々あんだけよな。何も考えてなかつたわ。
俺。悪い。」

原田は、視線を足元の方に向けている。
だから顔はよく分からない。

けれど、その言葉に嘘は感じられなかつた。

「私だつて、ひどい事言つたよ。」

「いいんだ。あれくらいやつてくれなきや、俺は分からんかつた。」

私は、昨日の事を思い出す。

原田には悪いことをした。と思つと同時に、私は何だかとても素直になれた気がした。

「あの、それで江美利なんだけどさ。アイツ、西に言われたんだ。
芦口と付き合つなつて。」

「え……？」

私は、耳を疑つた。

西が？

まさかそんな……

「な、なんで？！」

「江美利と一緒にいるから、芦口の成績が下がるんだつて。最低な

教師だよ。だから芦口は悪くないんだ。俺が、勇気なくてさ。芦口にハツ当たりした。」

「ごめん。

と原田は力なく言った。

目頭が熱くなる。

私は、信じられなかつた。

西は、何を考えているのだろう。

疑問と西に対する激しい憎悪が込み上げてくる。

どこまで汚い人間なのだアイツは。

怒りを通り越したそれは、胸を締め付け口が利けない程に私を縛り付けた。

「江美利……。」

江美利。

江美利は西から言われた時、どんな気持ちになつただろう。

少なくとも彼女は西を慕つていたし、たがらそれだけに幻滅したかも知れない。

私を嫌悪してたかもしれない。

私は、そんな事が起きていたなんて少しも考えようとななかつた。

その時点で私は、既に彼女から身を退いていたのだ。

信じていなかつたと言われても反論は出来ない。

それなのに、私は自分の事ばかり考えて、面倒だと逃げていた。

最低だ、私は。

でも、今の我なら言える。

彼女に伝えたい事を。

今まで言えなかつた沢山の事を。

伝えたい事は口に出せなければ伝わらないのだ。

「原田君。江美利の居場所分かる？」

私が、聞くと原田は少し驚いた顔したが、それでもしつかりと答えた。

「多分、職員室。アイツ週番だから。」

「そうか。分かった。」

「どうするの？」

「今まで言えなかつた事、言つてくる。昨日みたいに。」

嘘じゃない。

今、言わなくてはいけない気がしたのだ。

「そつか。なんか初めてだわ。芦口のキレてんのみたの。だつてお前、普段他人に無関心そうじやん。話した事も無かつたし。」

他人に無関心か。

私は、そんな風に思われていたんだ。

「…だから、私、江美利にも言わなくちゃ。」

自分の声が力になつていく気がした。

それは、とても強くて確かな感覚だった。

「うん。頑張ってな。」

原田が笑う。

「ありがとう。」

自然に笑顔が零れる。

久々に自分のために笑つたと私は思った。

私は、荷物を持ったまま教室を飛び出した。
騒がしい廊下を歩き、職員室へ向かう。

階段を降り、渡り廊下を駆け足に渡つて、図書室の前を通り過ぎる。

前から誰かが歩いて来ていた。
聞き慣れた声で彼は私を呼ぶ。

「おい。芦口。」

「先生！」

「どこ行くんだ？」

「伝えたい事を伝えてくるんです。」

「そつか。」

先生は、笑っていた。

「先生。」

「ん？」

「ありがとうございます。」

私は、その一言に様々な意味を込めた。
こればかりは言えないけれど、それでもいいのだ。

きっとこのままで。

私は、先生の肩をポンと軽く叩いた。

「行つてきます。」

「行つてらつしゃい。」

先生があの、柔らかい笑みで私の頭を撫でる。

甘く低い声は、私の背中を押した。

私は、再び歩き出す。

窓から流れ込む優しい光を辿つて空を見上げた。

今日、母さんの所へ行こう。

そして言つのだ。
ごめんな、と。

私は、これまでよりもずっと前向きな気持ちで、江美利いる職員室を田指した。

必ず上手く行く。

そんな不確かなる確信が、今の私には満ち溢れていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8927d/>

きっとこのまま。

2010年12月26日14時10分発行